

日本人だからこそ。

群馬県 ぐんま国際アカデミー 三年
増田 泉

「Please act as if you are the representatives of Japan. 皆さんは、日本を代表する気持ちで、恥ずかしくないように行動しましょう。」小学六年の秋、私は学校のプログラムの一環で約一ヶ月間、オーストラリアへ短期留学に行きました。先程の言葉は、留学に立ち、担任の先生から頂いた言葉です。

オーストラリアへ着いて、一週間ほどたったその日、街はハロウィンで賑わっており、ホストファミリーとの夕食中、ハロウィンの話で盛り上がりました。すると、日本では十月に、どんな行事をするのか、聞かれました。「日本も十月はハロウィンかな。かぼちゃ味のものを食べたり、渋谷なんかでは、仮装した人たちが、いっぱい集まっているよ。」私がそう言うと、

「えっ、ハロウィン？もつと日本っぽい行事ってないの？」

と驚いた表情で言われてしまいました。日本で十月にハロウィンを祝うこと自体に間違いはありません。しかしなんだか、間違えたことを言ってしまった感覚になりました。同時に私は先生の「日本を代表する」という、あの言葉を思い出しました。もつと良い答えがあったのではないか。「ハロウィン」と答えてしまった私は一体本当の日本人と言って良いのかと自己嫌悪に陥ってしまいました。

短期留学から三年余りが過ぎた今、日本には歴史ある年中行事が、数多く存在することを強く感じるようになりました。日本列島に暮らしている日本人は、季節に敏感であり、四季の変化が生活リズムを作っていると言っても、過言ではありません。日本独自に形成された、美しい年中行事は、人々に季節を感じる機会を与え、私たちを明るく気持ちにさせてくれます。核家族が進む今、日本の伝統的な年中行事を継承する機会が減少し、多くの若い世代の人々は、どんな意味で、どんな目的を持って年中行事を行うのかを、理解していないまま、その時期がきたからやる、というように考えているのではないのでしょうか。ましてや目的以前に、あの時の私のように、各月の日本の年中行事が言えない若い人たちも、いるのではないのでしょうか。グローバル化による、均質化が進む現代社会においては、独自文化への愛と理解を高める必要があります。歴史ある、四季がはっきりとしたこの国に生まれた私たちは、日本の伝統的な年中行事を、自ら体験し、理解し、愛し、そして、継承していく必要があると思います。そのためには、「伝統文化の継承」という課題に対する、「時代に合った」ソリューションを導き出すことが重要です。

お正月、節分、ひな祭り、お盆、十五夜。日本の年中行事は、家族で行うものが多く、家庭内の文化にとどまってしまう傾向があります。そうなると、文化の発信者は、私達の祖父母が主になるでしょう。核家族化による祖父母たちとの接触の減少によって、年中行事を理解することが困難になってしまいます。もちろん、発達したインターネットを駆使すれば、基本的な情報の獲得や、ビデオ通話を通じた祖父母たちとのコンタクトは可能です。とはいえ、受け手側の私たちは、発信者と共に行事をできるわけではないため、不安が生じ、やりたくないと感じる人も出てくるでしょう。ならば、「家庭内文化」という形を崩してみてもどうでしょうか。これは単なる一例に過ぎませんが、今頭に思い浮かぶのは、地域のおじさん、おばさん達の取り組んでくださった正月前の餅搗きです。もくもくと湯気が立ったお米を、力強く搗く姿を見ていたため、作り方を学ぶとともに、感謝の気持ちで食べられました。今は昔のように、自分たちで餅を搗くことは珍しいと思います。家庭よりも規模を拡大し、地域コミュニティで行えば、発信する大人とともに行事を作ることができ、受け継がれてきた伝統に触れられると思います。

何を変えずに、何を変えていくのか。今やコロナウイルスによって、地域活動さえ、行うのが困難になっています。それでも、ニーズを追い求めて進化することで、継承を促すことができる。私は信じています。自分もいつか、発信する側に立ち、日本の年中行事

を伝えていきたいです。歴史ある、美しい四季があるこの国に生まれた人間だからこそ。
日本人だからこそ。